Osaka University Knowledge Archive

Title	＜書評＞フェリッペ・モッタ『移民が移民を考える：半田知雄と日系ブラジル社会の歴史叙述』初版、大阪大学出版会、2022年、317頁、定価6,050円
Author(s)	鈴鹿, 翔大
Citation	未来共創. 2024, 11, p. 240-243
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97818
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

書評

フェリッペ・モッタ『移民が移民を考える—半田知雄と日系ブラジル社会の歴史叙述』

初版、大阪大学出版会、2022年、317頁、定価6,050円

鈴鹿翔大

本書の課題は、「一人の移民の思想と活動に着目することにより日系ブラジル社会の歴史、その叙述過程、また『移民研究』という分野についての示唆を与えることである」（P.8）。著者は思想史と社会史の手法を組み合わせて、日系ブラジル社会で活躍した移民知識人である半田知雄についての考察を試みている。半田の生涯と業績から日系ブラジル移民史に光を当て、それを通じて日系ブラジル移民研究の諸問題を再検討することを著者は目指している。

著者によると、半田知雄は1930年代に公的な執筆活動を通じて日系ブラジル社会の在り方と歴史を多面的に考察しようとした人物であるとされる。半田は自身の評論と著作を通して「移民史」に繰り返し焦点を当ててきた。また、画家として初期移民の姿を描いたことでも知られており、後に「移民画家」と呼ばれるようになる。半田は1906年に日本で生まれ、1996年にブラジルで亡くなった。彼の移民としての第一歩は、半田一家が珈琲農園の契約移民としてブラジルに渡ったときであり、当時の半田はわずか11歳であった。本書は、半田が常に抱えていた移民として「移民」という課題に取り組もうとする姿勢を見つめ、「知」の生産における公と私の交点において、行為主体者として歴史叙述に関わる知識人の存在に光を当てるものである。

本書は大阪大学大学院文学研究科に提出された博士論文をもとにした一冊である。以下では各章の概要について述べる。

第1章では、戦前から始まり、戦後に本格的に組織化される日系ブラジル社会の知識人グループの存在とその言論空間に焦点が当てられている。第1節では、積極的に知的営為に従事する移民知識人について紹介される。また、著者の佐々木（2020）に対する批判的検討から、本書が佐々木を乗り越える研究として位置づけられることが確認できる。本書は代表的な知識人グループ「土曜会」系統の3つの機関誌である『文化』『時代』『研究レポート』に着目する点も特徴となっている。第2節では、半田の著作である『移民の生活の歴史』の成立過程に注目する。日系ブラジル移民の総合史としての性格を持つ同書は、当時までに蓄積された移民史をめぐる業績を参照しながら叙述された点が重要であると著者は指摘する。

第2章は、半田の少年時代の記憶に関する記述について論じるものである。珈琲農園で子ども移民として過ごした時

人間科学研究科教育環境学講座；suzuka81064@gmail.com

期は、半田の生涯に強い影響を与え、後の『移民の生活の歴史』と<移民絵画>にも表象される。半田の少年時代に関する3つの長編記述から、その記憶がどのように再構築・再編成され、物語=ナラティブとして再解釈されるかを著者は論じる。その際に、公（集団史）と私（個人史）が互いに影響し合うプロセスに焦点を当てると同時に、移民研究におけるエゴ・ドキュメント論の可能性も追求している。

第3章では、画家としての半田知雄の活動と芸術意識に着目している。半田は生涯を通じて「絵かき」としての自己意識を保持していた。半田の創作活動にとって特に重要だったのは旅（写生旅行）であり、半田の執筆活動と絵画制作を結びつける軸は「生活」に対するこだわりであった。著者によると、本書で用いられる<移民絵画>という概念を分析する際には、作品論と受容論という二つの視点から考察を進めることが重要とされる。そこに表象される風景は、風景画であると同時に、人々が空間に対して働きかける有様が描かれており、移民が能動的に活動する意味合いを含んでいる。

第4章では、日系ブラジル社会の歴史と戦争の問題が考察される。『移民の生活の歴史』における「移民の悩み」という表現の正体を追求し、それを通じて、半田が理解する「長きにわたる戦争」の意味合いについて論じている。「長きにわたる戦争」はヴァルガス政権における国家主義的政策、戦時中の敵性国民としての圧迫、戦後の勝負抗争にまで続くものであった。加えて、著者は勝負抗争に関する歴史と記憶を総括し、半田が主張する戦後に叙述される日系ブラジル社会の歴史=正史から零れ落ちる複雑性を捨象する手段として、移民による文学作品(本書では『コロニア万葉集』に収録された短歌作品数点を挙げている）の可能性も検討している。

第5章では、『今なお旅路にあり』に収録されている論考を中心に、半田の思想経路を辿っている。そのなかで、半田の思想における中心的問題として存在する文化継承・言語・移民心理の3つの要素に着目している。これらの要素は関連しており、半田の移民像を形作っている。この思想経路を時系列的に辿りながら、半田が移住の意義をどこに見出していたのかを論じている。

これまで、本書の構成に従ってその内容を辿ってきた。本書は、一人の移民の思想と活動を丁寧に分析した貴重な研究成果である。評者は全体を通じて本書を興味深く読んだ。最後に、以上のような

理解に基づいて簡潔ではあるが論評を行いたい。

著者は本書の課題として「『移民研究』という分野について示唆を与えること」（P.8）を述べている。一方で、著者による移民研究領域への示唆についてもう少し掘り下げた議論を期待したかった。導き出された総合的な知見から、移民研究への具体的な意義や学問的示唆について著者自身がどのような見解を持っているのか、という点に関して詳しい説明が欲しかった。そのような関心を持ったとき、5 章で半田によって描き出された文化継承・言語・移民心理への着目は、移民研究における歴史学的観点からの貢献だけでなく、現代の移民問題を捉える上でも重要な示唆を与えるのではないだろうか。現在、ブラジル社会においてモデル・マイノリティと評される日系人の存在と日本社会において相対的に厳しい立場に置かれる日系人の存在が指摘されている。この両者に対して、半田はどのような見解を持つのだろうか。半田がこれまで描き出してきたものから現代の社会状況を読み解くという点も意義の大きいものと言えるだろう。

しかし、いずれにしても本書は示唆に富む研究成果であったことを再度強調したい。本書は日系ブラジル史や日系ブラジル移民を考える上で重要な一冊であり、移民研究及び、日系ブラジル人研究に与える影響は大きいものであろう。

> 「半田は生涯を通して移民を対象にした。その思想は、一言でいうと対抗の思想であった。それは移民を押しつぶそうとする同化過程に対抗するものであると共に、ナショナリズムの犠牲者にされた移民に対する深い愛情によって湧出した思想である。半田の言を信ずれば移民は理解不能な存在かもしれない。が、本書がその理解に少しでも役立ったら、著者としてこれ以上の幸せはない」（P.262）。

これは著者の結びの言葉である。「半田にとって移民について考える、移民について書くことは極めて重要であり、彼が移民史の多様性、移民をめぐる多声的なナラティブを訴えていた。理解してもらえない存在であっても、それについて書き続けたのだ」（P.249）。確かに、移民を完全に理解することは難しいかもしれない。しかし、半田の歴史を辿ることは、日系ブラジル社会の現在とその形成過程の理解を深めるとともに、未来を考える手立てとなるだろう。半田が描き出

したものは、私たちにとっては「過去」のものであるかもしれない。しかし、その「過去」に向き合いながら「現在」や「未来」をこれまでとは異なるものとして捉え直すことを可能にする新たな視点を本書は提供してくれるのではないだろうか。

参照文献

佐々木剛二
2020 『移民と徳――日系ブラジル知識人の歴史民族誌』名古屋大学出版会。